人間科学全書レビューシリーズ2
磁場の生体への影響・その後　―1991年から2003年までの総説―

志賀　健　著

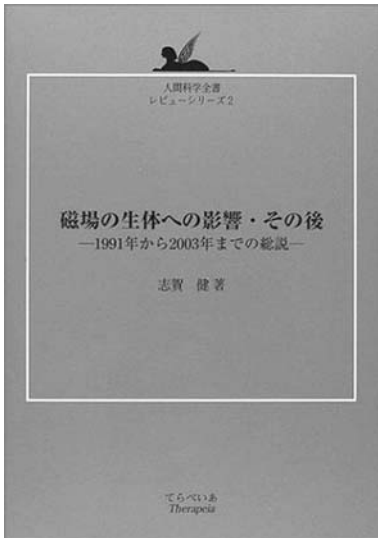
B5版，227ページ，￥3,120
（てらぺいあ，2004年8月26日発行）

推薦図書の執筆の依頼を引き受けたとこ，筆者は日ごろから気にはなっていた電磁波に関する本を紹介したいと思った。電磁波を発するものには送電線や携帯電話，室内環境中では家電製品全般，コンピュータ，IHクッキングヒータなどが多数存在し，気がつくとわれわれは電磁波を発するものに囲まれて生活していたといえる。高齢社会となったわが国では，在宅医療の一環として高強度の電磁波を発生する医療器具が一般的に室内に設置，持ち込まれることが予想される。

このような状況を踏まえ某インターネット書店で「電磁波」というキーワードで検索をかけると約170冊ほどの本がヒットする。近所の図書館に約20冊ほどの電磁波関連の本があったのでこれらの斜め読みしてみると，人の恐怖心をあおるキーワードがちりばめられたものばかりであった。それも文献の参考・引用の仕方が孫引きであったり，科学的根拠があいまいなものだったりする。

このような書籍が多い中で筆者が最初に紹介しようと考えたのがWHO（World Health Organization，世界保健機構）から発行されたEnvironmental Health Criteria 238の“Extremely Low Frequency Fields”（ISBN 978 92 4 157238 5）である。これは2007年6月に発行された全519ページの「極低周波の電磁波による健康影響」の研究論文であり，Chapter 1: Summary and recommendations for further study, Chapter 2: Sources, measurements and exposures, Chapter 3: Electric and magnetic fields inside the body, Chapter 4: Biophysical mechanisms, Chapter 5: Neurobehaviour, Chapter 6: Neuroendocrine system, Chapter 7: Neurodegenerative disorders, Chapter 8: Cardiovascular disorders, Chapter 9: Immune system and haematology, Chapter 10: Reproduction and development, Chapter 11: Cancer, Chapter 12: Health risk assessment, Chapter 13: Protective measures, Appendix: Quantitative risk assessment for childhood leukaemiaの構成でまとめられたものである。

WHOのEnvironmental Health Criteriaを斜め読みし一段と電磁波について書かれた図書を紹介したいという気持ちが強くなった。そうこう粘っているうちに，たまたまとある本屋で今回紹介する「人間科学全書レビューシリーズ2　磁場の生体への影響・その後　―1991年から2003年までの総説―」という本を手にとる機会があった。本書は科学的根拠を基づいた磁場の生体影響に関する論文のレビュー書である。つまり，著者の感情が入ることなく学術論文より収集した情報が淡々とまとめられたものである。実は本書同出版社より発行された「磁場の生体への影響」の続編で，情報がフォローアップされている。本書の構成は，第1章：磁場の種類と生体作用および物質磁気性性質，第2章：定常磁場の生体への影響，第3章：パルス磁場の生体への影響，第4章：極低磁場（ELF磁場）の生体への影響，第5章：今後の研究への提言の5章からなる。



2008年現在は電磁波による健康影響は「科学的に不確実（scientific uncertainty）」と定義されている反面，電磁波により健康被害を訴える人が多いのも事実である。このような状況の中，特殊団体や営利目的団体を代弁した書籍やスポンサーが丸抱え研究の報告書が多いように見受けられる昨今，本書は脚色のない事実がまとめられたものであり推薦できる図書であるといえる。

（東京大学　大学院新領域創成科学研究科　准教授　熊谷一清）